琉球大学学術リポジトリ

台湾(桃園市・台北市)の英語村：日本での応用を考える

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2017-02-27
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 大城, 賢, Oshiro, Ken
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/36428

台湾（桃園市・台北市）の英語村
～日本での応用を考える～

大城　賢

A Study of Taoyuan and Taipei City English Villages in Taiwan For Establishing English Villages in Japan

Ken OSHIRO

はじめに

2015年7月16日から17日の2日間、台湾の台北市及び桃園市に所在する英語村を視察する機会を得た[1]。本稿では、限られた訪問ではあったが、台湾の英語村の実情を報告し、日本での応用について検討する。

台湾の英語村を理解するには台湾の英語教育を理解しなければならない。なぜなら、英語村は台湾の英語教育改革の1つとして発想されたものであり、学校教育との結びつきが強いからである。そこで第1節においては台湾の英語教育の状況を概観する。第2節においては快樂英語村、第3節においては文昌英語村、そして第4節においては濱江英語村について、その概要と筆者の感想を記す。第5節においては、韓国の英語村にも言及しながら、英語村の4つのタイプについて述べる。最後に、今回の視察から得られた知見や韓国での事例を基に、日本における英語村、特に市町村が設置する場合の英語村について考察する。

本稿の執筆にあたっては、訪問の際に入手した資料や担当者の説明を基にした。また、各英語村が公開している公式ウェブページの情報も参考にした。

1．台湾の英語教育事情

日本や韓国と同様、台湾においても、1990年代より、グローバル化に対応した英語教育の改革が始まった。改革の理由は、日本や韓国と同じで、従来型の「読み・書き」を中心とした指導法ではグローバル化には対応できないというものであった。

台湾の英語教育改革は2本の柱からできている。1つは小学校で英語を教科として導入することであり、もう1つはすべての国民に基本的な英語力を身に付けさせるというものである[2]。後者については、本稿の目的から外れるため、言及しないが、英語村は前者の小学校への英語教育の導入という文脈の中で創設されたものである。したがって、前述したように、台湾における英語村を理解するには、台湾における英語教育、とりわけ小学校における英語教育との関連で見ていく必要がある。

台湾では教育部の規定により、2001年度より、小学校5年生からの英語教育が義務化され、2005年度には小学校3年生、4年生へと開始時期が早められた。教育部の規定が日本の学習指導要領と異なる点は、台湾の教育規定が必要最低限のガイドラインのようなものであり、地方自治体によって、かなり自由な形で教育課程を編成できることである。実際、台北市では国の規定によらず、2002年度から、全市において、小学校1年生から英語教育を開始している。

台北市を含む3分の1の市・県では、小学校1年生から英語教育を実施している。実施時間は、1、2年生は2時間、3年生から6年生は週3時間、中学校では必修の3時間に加え、選択必修としての週1時間から2時間の授業時間が確保されてい

る[3]。このことから、台湾においては、英語教育の質及び量においては、かなりの地域差があるのではないかと思われる。したがって、今回訪問した英語村は、台湾全土で展開されていると考えるのではなく、台湾の主要都市の1つである桃園市、及び台北市における事例であることを了解して頂きたい。

桃園市は2014年12月25日に桃園県から中華民国行政院の直轄市に昇格した市である。台湾の空の玄関口である台湾桃園国際空港が所在する市である。工業が集中している地域で、人口は約207万人（2015年3月）である。人口が最も多い桃園区（約42万人、2015年3月）をはじめ13の区からできている。

今回訪問した2つの英語村は桃園区に所在している。桃園区には24の小学校があり、快樂英語村は快樂国民小学校[4]に附設されている。また、文昌英語村は桃園区の14ある中学校の1つである文昌国民中学校[5]に附設されている。

台北市は中華民国の中心都市である。アジア屈指の世界都市でもある。人口は約261万人（2010年11月）で、台北市には12の行政区がある。今回訪問した濱江英語村は、市の中心部である中山区に所在する濱江国民小学校に付設されている。中山区には、11の小学校があり、濱江国民小学校はその1つである。

2．快樂英語村

快樂英語村の概要[6]は以下のとおりである。

目標：英語村は、児童に国際的な視野を与えるとともに、英語教育と実際の英語体験をつなぐ環境を提供するものである。授業はイマージョンの手法[7]に基づき計画されている。つまり、外国に滞在するのと同じ空間を作り、児童の英語への興味と自信をつけさせ、世界的な視野を持たせることである。

英語村の6つのE[8]

Exploration（探究）
E-learning（e-ラーニング）
Entertainment（楽しさ）
Experience（経験）
Environment（環境）
Ethics（倫理）

施設の特徴

・学校周辺の自然環境と合致するように、緑化空間を作り、最適な活動スペースが確保できるようにしている。
・施設は小学校の活力が示されるようなデザインとし、多目的で創造的な活動の場となるように設計されている。
・児童が活動しやすい設計にし、施設の中で、相手をいたわる心や、愛情や尊敬の念が醸成されるようにしている。

英語村の開村

2007年9月13日に正式に開村し運営が開始された[9]。

英語村の運営組織

村長：朱建菁校長（小学校長併任）
村主任、総務係、組長、教務、
村幹事、英語専長替代役、人事係
外国人教師7人（性別：女性1名、男性6、国籍：アメリカ、カナダ、南アフリカ、ニュージーランド、学位：修士1名、学士6人、給与：桃園市が全額負担）[10]

1日体験プログラムの概要

(1) 始めに全体のオリエンテーションを行う。その後、10人程度から構成されるA～Hのグループを作り、グループごとに日課表に従い活動場所（空港、レストラン、ショッピング、病院、銀行など）を移動していく。

(2) 参加対象児童は快樂小学校5年生（10才）だが、英語村のない学校などの児童も受け入れている。
(3) 1日で体験できるのは4つの活動場所が上限である。例えばAグループならば「病院」「商店（ショッピング）」「料理」「空港」という4つの教室で学ぶことになる。
(4) 参加児童は入村前にネットなどで内容を確認することができる。
(5) 1日体験では英語力を上げるというよりも、児童のモティベーションを上げることが目的である。
(6) 児童だけでなく地域の人々にも開放されている。
(7) 1日体験以外にもsummer campが用意されている。

筆者の訪問時にはドラマ教室と理科教室で体験活動が行われていた。ドラマ教室では10名ほどの児童がネイティブの先生と一緒に劇のセリフを練習しているところであった。長めの英語の文章をすらすら音読していた。また、理科教室では同じく10名ほどの児童が体験活動を行っていた。

英語村では、どこでもそうであるように、外国の施設を模したレストランや病院などで英語を実際に使う模擬体験をすることができる。担当者の説明によると、あくまで英語のモティベーションを高めることが目的であり、英語そのものの力を上げることは意図されていない。どちらかというと、覚えてきたダイアローグをネイティブの先生を相手に使ってみるという活動が主となっているということであった[11]。児童にとっては「一度体験すればそれで終わり」ということになっていないか、実際の授業をさらに詳しく見ていく必要がある。

理科室では理科の授業が行われているようであったが、担当者の説明によると、理科の内容を教えている訳ではなく、ネイティブの先生も理科の先生ではないということであった。それでは何をしているかということになるが、たとえば人体模型を見ながら、人体の語彙を覚えるというような活動が主になっているということである。詳しくは後述するが、これは外国語教育で主流となりつつあるContent-based[12]の手法とは表面上は似ているが全く異なるものである。筆者としては、むしろContent-basedにしたほうが、児童の興味や英語力の向上という点からは効果的ではないかと考えている。

3. 文昌英語村

文昌英語村は文昌国民中学校に敷設されている英語村である。生徒数の減少とともに、空き教室となった施設を改築して英語村にしたということであった。文昌英語村では、質疑応答の時間が確保できず、施設を回りながらの聞き取り調査となった。以下は文昌英語村の公式ウェブページ[13]からの情報である。

＜経緯＞
・行政院は、現在の台湾の英語学習が文法重視になっているため、読解能力はあっても実際に英語で会話する能力に大きな課題があるとの認識から英語教育の改革に乗り出した。
・2002年に英語教育の改革目標を設定し2008年度の実施を目指すこととした。
・改革の1つに英語環境を作って英語を話す恐怖心を打ち破ることが大切と考えた。
・韓国は近年国民の英語の水準を高めるために力を尽くしており、最近では、巨額の資本をつぎ込んで英語村を建設している。そこで、桃園市教育局は文昌国民中学校を選定して、規模は韓国に及ばないが、韓国の英語村を模して、国民中学校に英語村を敷設することにした。
・学校長や主任、そして教師で作る視察団を構成して、韓国のSeoul English Village、Seongnam

English Town (SNET)、および Gyeongi English Village を視察した。

＜目的＞

1. 英語を話す実際の環境を作り、小学生及び中学生の英語能力の向上及び英語への興味を喚起する。
2. 外国の環境を模した教室の中で、現実に近い生活体験をさせ、学習者を奮い立たせて英語への興味と関心を高める。
3. 直接的で実際に近い経験を通して、積極的かつ自発的に英語を学ぼうとする学習者を育成する。
4. 英語の環境を作ることにより、桃園市の小中学生の英語能力を高める。
5. 実際に海外で研修するとなると費用は高額になる。英語村を活用することにより、研修費用を安くすることができる。

＜設備＞

1. 当校の科学のビルの1～4階（地下室を含む）を英語村の施設に改築する。
2. 外国の環境を模した教室を8つ。展覧室1つ、レストラン1つ、事務室1つを設置する。
3. 経費は県や府の補助及び企業からは教室環境整備の補助を受ける。

＜人員＞

1. 村長1人、主任1人、行政の組長1人、課程長1人、責任者1人。
2. 外国籍の教師7人を任命して、英語村の教育を担当させる。

＜年表＞

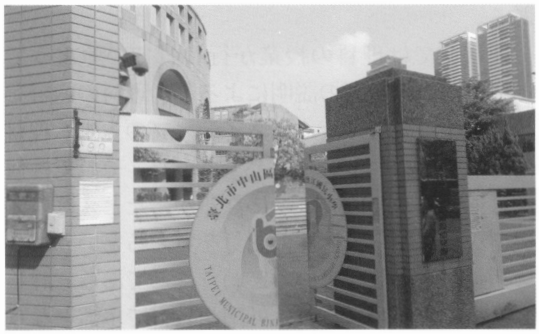
・2006/04：国際英語村の設立記者会見
・2006/05：韓国英語村調査
・2006/08：国際英語村設置準備会議
・2006/08：外国籍の教師の契約書の内容の検討
・2006/11：国際英語村開村についての会議
・2006/11：桃園国際英語村文昌村の規則の検討
・2007/01：外国人教師の面接
・2007/11：文昌英語村の開村

文昌英語村でも、快樂英語村と同様、近隣の小学校の児童を招いて1日体験プログラムなどを実施している。施設（空港や銀行など）の種類は前述の快樂英語村とほぼ同様のものであった。唯一異なる点は、快樂英語村には図書室があったが、ここには設置されていなかった。

ネイティブの先生の1人が私たちを児童に見立てて、空港教室の活動をデモンストレーションしてくれた。チェックインから始まり、セキュリティーチェック、搭乗、着席、飲み物サービス、機内アナウンスなど、一連の流れを僅かだが体験することができた。担当者との立ち話で児童がもっとも盛り上がるところはどこかと訊ねたところ、緊急脱出に使う脱出用スライド（実際は滑り台のようになっている）だということであった。半分は冗談だと思うが、もし仮に滑り台を楽しむだけの施設であれば、もったいない話である。実際に児童が活動する場面は観察することが出来なかったので、児童の様子がどのようなものなのかは想像するしかない。日本では小学校の児童を活動させることは難しい場合が多く、外国人教師だけでは児童の指導が難しいことが報告されている。施設内で英語を使うといことよりも、施設内で“遊ぶ”ことがないようにする必要がある。また、外国人教師には、集中力が短い児童を指導することが可能な指導技術が必要であろう。

因みに、案内をしてくれたネイティブの先生に、中学生もこの施設を利用するのか訊いてみた。中学生もこの施設を利用するが、中学生には、このような施設を使っての活動は（子供じみていて）難しい、ということであった。

4．濱江英語村



濱江英語村の概要[14]は以下のとおりである。

ビジョン
- 英語環境を提供し、英語教育を推進するとともに、国際的な視野を持ち、世界に通用する児童の育成に役立てる。
- 海外の英語環境を模した教室環境を提供し、児童が英語のみで生活する体験を保障し、英語の能力の向上に資する。
- 台北市の英語村センターとしての役割を果たし、英語の授業やカリキュラムの開発などに貢献できるようにする。

設置目標
- 濱江小学校の児童に英語を学ぶ環境を提供し、彼らの英語への興味を喚起し、国際的視野を広げる。
- 第二言語教育分野の専門家のネイティブスピーカーを採用し、授業などを公開することにより、台北市の小学校英語教員の授業力の向上を図る。
- 他の小学校の児童を受け入れ、彼らにも英語教育環境を提供する。
- 外国人教師の採用、雇用、配置などのモデル的な役割を果たす。
- 英語教材、とりわけマルチメディアやインターネットを使った英語教育を率先して行い、英語教育におけるITの活用を促進する。

活動
- 英語村では英語のみの会話を行う。
- 英語村の教室環境は全て実際の外国の環境を模している。
- 台北市の小学校英語カリキュラムに基づき活動を行っている。

教材（教室）
- 教材（教室）は2種類からなっている。1つはレクレーション的な教室で、もう1つは家庭生活と関連した教室である。
- レクレーション的教室は交通ゾーン、ホテル、キッチン、レストラン、世界の窓、そして英語館である。
- 家庭生活的教室はスーパー、体育館、理科室、美術教室、ホームタウン、病院などである。
- 生活場面は家庭生活と関連しているので児童は実際の家庭環境を模した教室で英語を使う体験をしていく。

指導者
3人の外国人教師と3人の台湾人教師がいる。全員有資格者である。

施設利用者
台北市の全小学校の児童を対象としている。事前に予約が必要である。最大70人の児童が一度に授業を受けることができる。

利用方法
オンラインで受け付ける。オンライン上で希望する曜日に空席があるかどうかを確認。空席があれば、在籍する学校の承認を得てファクスで申し込む。その後、電話で確認。

活動内容・方法
他の学校からの訪問受講の場合はクラスを2つに分ける。プログラムに沿って児童は異なる複数のsituations（場所）で体験を行う。授業はネイティブと台湾人教師によって行われる。児童は体験を行う前にオンラインで事前学習を行う。クラスによっては通常の英語の時間に事前学習を行う場合もあるが、児童が個別に学習する場合もある。オンラインでの学習は、アニメのキャラクターなどが登場し、児童の興味を引くものになっている。児童は数名のグループに分かれて場所を移動する。体験活動が終わると、児童は再びオンライン上で復習を行い、テストを受けることになっている[15]。何度もウエブサイトを訪問することにより、学習が進み英語力を向上させることができる。それぞれの教室で上手く活動を行えばポイントが貰える仕組みになっている。活動ポイントによってクラスで表彰され賞品が貰える。

その他事項
交通費や保険はそれぞれの学校で負担する。

児童は飲み物（水）と鉛筆を持参する。

英語村の週間スケジュールを見ると、月曜日は教材作成日である。火曜日と木曜日は他の学校の児童を受け入れる日である。月曜日の午後、そして水曜日、金曜日が濱江国民小学校の児童の活動日である。濱江国民小学校では通常の英語の授業週3回、英語村での授業が週2回行われている。濱江国民小学校の児童は、期末にはオーラルテストを英語村の先生と1対1で行う。筆記テストは通常クラスで行っている。

濱江英語村からは、これまでの成果をまとめた報告書とレッスンプランが書かれた冊子を入手した。報告書には「The outcome and lesson plan of Situational Learning[16] at Binjiang English Village in Taipei City（下線筆者）」と記されている。快樂英語村では指導理念を "immersion" としていたが、ここでは "immersion" という用語は担当者の口からも一度も聞くことがなく、また、印刷物の中でも、一度も使われていない。同じ英語村でも、指導理念が異なっているように思われる。ちなみに、Situational Learning（=Situational Approach）は、状況や場面を中心に教材の選択、配列、提示を行い、英語力を養う方法である。「税関にて」「銀行にて」「駅にて」など、学習者が実際に遭遇しそうな場面や状況を設定し、これらを柱としてシラバスを編成する。状況シラバスの問題点としては、文法を体系的に教えることが困難なこと、状況を適切に選定し、配列する方法が確立されていないこと、などがあげられている。さらに、特定の場面で典型的に使われる表現は身についても、状況の違いを越えてこれらの表現を創造的に使う能力が育たない傾向があることも指摘されている[17]。

濱江英語村の説明において興味深かったのは、通常の授業（週3時間）と、それに組み込むような形で英語村での授業（週2時間）が設定されていることである。残念ながら、通常のカリキュラムと英語村での体験がどのように関連しているかについては、時間の制約もあり質問することができなかった。

英語教育の指導法としては、伝統的には文法をコミュニケーションとは切り離して教えてきた。実際に使う場面に遭遇したら、文法の知識を使って、コミュニケーションが可能であろうと考えたのである。しかし、現実にはそうならなかった。そこで、現在ではコミュニケーションを体験させながら、文法を指導する方向に指導法が大きく転換している。文法とコミュニケーションは切り離して教えた方がよいのか、それとも一緒に教えるべきなのかについては、いまだ多くの研究者や実践者の間で議論が続いている。濱江国民小学校の英語の授業は参観していないのでよくわからないが、文法は通常の授業で行い、コミュニケーション活動は附設の英語村で行うということかもしれない。日本の英語教育は文法とコミュニケーション指導の分離型から、文法とコミュニケーションの一体型へ大きく舵を切っている。どちらのほうがより効果的なのかという点からも、濱江国民小学校の英語教育は興味深いものである。

5. 英語村のタイプ

英語村はいくつかのタイプに分けることができる。1つ目は、今回の視察でみたような小学校附設型、2つ目は韓国の京畿英語村のようなテーマパーク型、3つ目は江原道英語村のような教員研修中心施設型、4つ目は釜山にある Busan Global Village のような市民開放型である。以下、この4つについて、その特徴を記す。

(1) 小・中学校附設型

今回視察した英語村は2つが小学校に附設、1つが中学校に附設している。中学校に附設されている文昌英語村の場合は生徒数の減少によって空き教室が出たために空き教室を活用したということであった。利用者は、どちらかというと近隣の小学生が多いようであった。中学校へ附設する積極的な理由があったのかどうかは確認することができなかった。

英語村の設置は小学校への英語教育の導入と大きく関係している。前述したように、台北市及び桃園市では、小学校1、2年生は2時間、3年生から6年生は週3時間の英語の授業を行っている。総時数で考えると6年生までには455時間の学習時間がある[18]。これは日本の中学生の3年間の総

時数420時間を越える時間数である。濱江国民小学校の場合は、通常の授業で3時間、そして英語村での授業がさらに2時間ということであるので、小学校卒業段階で既に日本の中学校の総時数をはるかに越える732時間の英語学習が行われることになる。

筆者らが参観した快樂英語村ではたまたまドラマの授業を行っていて、児童は比較的長い文章をすらすら読んでいた。日本は小学校5年～6年の児童を対象に、外国語活動が週1時間導入されたばかりである。しかも教科とはなっていない。日本の小学生と台北市・桃園市の小学生では、英語力という点ではかなりの差があることが容易に予想される。しかも、台北市や桃園市は前述したように、台湾の中心都市で、アジア屈指の世界都市ともいわれている。桃園国際空港の巨大さを見ると、アジアビジネスの拠点の1つになっていることが実感できる。両市における小学校への英語教育の導入は、台湾のどの地域よりも早く実施された。それは、両市における、経済、社会面の急激な変化が背景にある。そして、その延長線上に英語村が創設されている。

日本の場合は、小学校の英語教育は台湾や韓国よりも10年以上の遅れがあると言っても過言ではない。日本の場合、現時点では5、6年で週1時間の授業時数である。しかも教科ではなく領域である。2020年頃には小学校高学年での外国語活動の教科化が予定されているが、おそらく、3～4年生で1時間程度、5～6年生で2時間程度ということになるのではなかろうか。日本の場合、英語に対する必要性や緊急性の認識は台湾や韓国と比べて低い。日本では小学校への附設型の英語村を創設するには、まだまだ機が熟していないのではないかと思われる。

(2) テーマパーク型

韓国には学校英語教育の補完、グローバルな人材の育成、英語能力の向上を目的とした英語村が国内に30カ所ほど設置されている。中でも最大級の英語村がソウルの北西にある京畿英語村（パジュキャンプ）である。2006年にオープンした。ソウルからは車で1時間30分ほどのところにある。

京畿英語村は広大な敷地に建設されている。空港を模した入口があり、出入国審査も体験できる。入村すると、イギリスの古城をイメージさせる建造物がある。その他、映画館や書店、レストラン、そして展示館や博物館まである。実際に映画を観ることができ、本も買うことができる。レストランでは食事もできる。もちろん宿泊施設もある。敷地内を巡る路面電車も走っている。

筆者が訪問した2008年当時は100人ほどのネイティブスピーカーが施設内で働いているということであった。ここでは、1日体験プログラムから、1週間プログラム、1ヶ月プログラム、そのほか特別プログラムなど、幼児から大人まで、あらゆるニーズに対応できるプログラムがある。商業ベースで運営されている。このようなテーマパーク型は、英語教育の観点だけではなく、経営的に成り立つかという点からの検討も必要である。

(3) 教員研修中心型英語村

筆者は2007年以来、数回にわたり、韓国江原道を訪問した。江原道には道立のGILI（Gangwan International Language Institute：江原道国際言語学院）という教員研修施設がある。英語村は、このGILIに附設されている。GILIの歴史は浅く、前身は2006年4月に開所された江原学生トレーニングセンターである。江原学生トレーニングセンターは主に学生の英語集中キャンプなどを実施してきた。それが2009年3月1日より教員研修を中心とする江原道外国語学院として生まれ変わったのである。本稿では、詳しく述べる紙幅はないが、以下のような様々な研修が行われている。

(a) 英語教師集中研修（宿泊：国内研修4か月＋海外研修2か月）
(b) 英語教師集中英語研修プログラム（オンライン：国内5ヶ月＋海外研修1ヶ月）
(c) 英語教師集中研修プログラム（国内3ヶ月＋海外3ヶ月）
(d) 小学校教師のための英会話研修
(e) 中等学校教師のための英会話研修
(f) EPIK-Co-Teachers' Joint Training
(g) 教師と学生による外国語体験プログラム
(h) 英語バスプログラム[19]
(i) 大学生の英語体験プログラム

このように教員研修を中心としながら、夏休み期間中は児童生徒向けのサマープログラムなどを実施している。児童生徒とともに、教員も参加するところが特長である。

筆者は英語の授業改善には英語教師の英語力向上が鍵であるという観点から、この施設に大変興味を持っている。GILIは、もともと日本のどこにでもある県立教育センターの1教科である英語科が、県立教育センターから独立したようなものである。韓国では、英語の重要性が国民的コンセンサスを得ていることがわかる。他教科を全て束ねても英語教員研修にかける予算のほうがはるかに多いという担当者の言葉が印象的であった。日本においても、そろそろこのような施設が検討されても良いかもしれないが、英語教員の研修にどれだけの予算を確保できるかが鍵になってくるだろう。

(4) 市民開放型

前述したように韓国には大小を合わせて30ほどの英語村がある。施設維持などでは、厳しい状況にある施設も少なくない。しかしながら、2009年にオープンしたBusan Global Village（釜山グローバルビレッジ）は、成功型の英語教育施設と言われている。筆者も2012年に訪問する機会を得た。

施設自体は他の英語村とほとんど変わらない。空港や入国審査の施設、銀行やレストランやショッピング施設などで、海外での生活を疑似体験できる。英語ネイティブと英語が堪能な韓国人講師50人ほどが働いており、それぞれのプログラムを担当している。

成功している理由はいくつか考えられるが、筆者は以下の4点が成功の要因ではないかと考えている。

(1) ドーナツ化現象で児童数が減っていった市内の小学校を整理し、その1つを英語教育施設に造り替えた。釜山市が直接の運営主体となり、市教委が連携してプログラムを運営している。「全ての市民、全ての児童生徒のための施設」という意識が強い。
(2) 釜山・西面エリアにあり、地下鉄など公共交通機関を使ったアクセスが可能である。立地条件がよく、市民が利用しやすい。京畿英語

村（パジュキャンプ）がソウル市内から1時間30分もかかることを考えると便利さが実感できる。市の中心にあるために、周りの小学校が1日体験などで活用しやすい。

(3) 幼児から社会人まで釜山市民向けの多彩な学習プログラムが用意されている。市民は気軽に英語力の向上のために利用することができる。税金を使うことに市民の理解が得やすい。

(4) 施設内に English Library が設置されている。幼児から大人まで、自由に利用できる英語の書籍が備えられている。ビデオ学習をはじめ、自己採点ができるコンピューターによる英語力判定テストも受けることができる。自己採点をしたあとに、自分の英語力に見合った英語の本を読んだりできる。自分が受ける学習プログラムを選ぶ際の参考にもなる。

この施設には宿泊所も完備されている。釜山市内の小中学生をはじめ、日本の小中学生も受け入れている。

6．市町村レベルでの英語村の検討

英語村にはいくつかの型があることを述べた。市町村レベルでの設置をめざすならば、(1) 型は、機が熟していないこと、(2) 型は設備が大規模過ぎること、(3) 型はむしろ県レベルで考えるべきであることなどから、(4) 型を基本形にすべきではないかと考えている。

筆者は、プログラム重視型の市民交流広場としての英語村を提案したい。プログラム重視型というのは、ハード面よりもソフト面を重視するということである。幼児から大人までを対象とした様々な外国語学習プログラムを用意し、施設での体験・学習にとどめず、例えば地域のインターナショナルスクールや大学で学ぶ留学生や地域在住外国人の活用などを組み込み、外国語学習及び異文化体験学習としてのプログラムを作成する。また、市民が気軽に異文化体験、異文化交流ができる広場として、児童生徒に限定せず、一般市民も気軽に利用できる施設を目指すのである。

今回の訪問で驚いたことの1つが、桃園国際空港の巨大さである。空港はその地域の経済規模を表している。桃園国際空港はアジアのハブ空港としての役割を果たしており、この地域の経済面での外国との結びつきが強いことを実感させられた。そのような環境の中ではコミュニケーションツールとしての英語が求められており、英語教育に対する意識が高いことは容易に想像がつく。

日本では、経済界の危機感とは裏腹に、教育現場では、まだまだ、「英語がツールとして使われる時代になる」という認識は低い。しかしながら、今後は、日本もグローバル化が一層進んでいくことが予想されている。

そのような中、特に筆者の居住する沖縄県は、アジアのゲートウェイとしての役割を一層果たしていくことが求められるだろう。また、物流の交流拠点としての位置づけが期待されている[20]。国内外からの観光客入域者数も増加の一途を辿っている[21]。那覇空港ターミナルのこの10年の拡張整備の状況を見れば、そのことを実感できる。

今後は一層、異なる言語や文化の人々と交流していくことが求められていくだろう。人と交流しなくても生きていけるかもしれないが、仲良くなることはない。平和な世界をつくるためにも、これからの社会を担う児童生徒には、積極的なコミュニケーションの態度や能力を身に付けさせることが必要である。

ヨーロッパの歴史をみると、彼らは隣国同士でありながら、血で血を洗う戦争を繰り返してきた。20世紀後半から、争いを避けるには異文化理解を含む外国語教育の重要性が認識され、EU内での複言語主義がどの国でも共通の言語政策として取り入れられた。アジアにおいても、各国が協働で異文化理解と言語教育を充実させる必要がある。そのような観点から、アジアの英語教育（外国語教育）の拠点としての英語村やアジアの児童生徒が一緒に学ぶことができるようなサマーキャンプなどが実施できる拠点としての英語村の創設は有意義でなないだろうか。

児童・生徒が楽しみながら英語を使い、世界の児童・生徒が英語で交流できるような施設は、英語コミュニケーション能力を高めるのみならず、異文化理解・国際理解の観点からも有意義であると思われる。

【注】

1 沖縄県沖縄商工会議所は、現在、英語村の設置について検討している。筆者も設置委員の1人として加わり、2015年7月16日から17日の2日間、台湾の台北市及び桃園市に所在する英語村を視察する機会を得た。本稿は筆者が独自に執筆したものであり、設置委員の総意で作成されたものではない。事実誤認や誤解があれば、全て筆者個人の責任である。

2 バトラー後藤裕子『日本の小学校英語を考える—アジアの視点からの検証と提言』三省堂、2005

3 本田勝久ほか『台北市における外国語学習環境—ひとつのカリキュラムと様々な授業実践』千葉大学教育学部紀要、2015

4 台湾では小学校を国民小学校と呼んでいる。本稿でもこの名称を使用する。

5 台湾では前項と同様、中学校を国民中学校と呼んでいる。本稿でもこの名称を使用する。

6 快樂小学校パンフレット及び当日の説明に使用されたパワーポイントの資料をもとにしている。原文は英語だが筆者が訳した。

7 イマージョンの手法とは、英語を教えるのではなく、英語で教科を教え、結果的に高い英語力の養成を目指すものである。1960年代にカナダで始まった方法だが、現在では世界各国に広がりつつある。しかし、快樂英語村の手法がイマージョンの手法と言えるかどうかは検討を要する。なぜなら、英語で教科（や内容）を教えるというよりも、学習した英語を使わせる体験という側面が強いからである。

8 担当者の説明によると、英語だけを学ぶのではなく、この6つのEを体験できる施設であるということである。

9 訪問時の担当者の説明では、桃園市当局の主導及び財政的な援助を受けて開村した。地元企業からも財政援助を受けたということであった。例えば空港や機内の備品については航空会社の寄付ということであった。

10 担当者の説明では外国人の獲得には韓国や日本との競争もあり苦労しているということであった。外国人はすべてESLの資格取得者である。給与は市当局から支払われている。年々給与がアップしていく仕組みになっている。修士か学士かによっても給与に差がある。快樂英語村での指導以外に、快樂小学校でも台湾人教師とティームティーチングの形で授業を担当している。

11 悪いことではないが、体験として必要なのは、覚えたことをただ単に繰り返すことではなく、自由度の高い状況のなかで実際に自分が話したいことを話し、聞きたいことを聞くという体験である。授業の観察が十分できず、実際にはどのような活動が展開されているかは確認できなかった。

12 一部の教科の内容を英語で教える。その手法の最たるものがイマージョン教育。

13 桃園市國際英語村文昌村ウエッブページ。原文は中国語。http://study.wcjhs.tyc.edu.tw/blog/index.php?op=ViewArticle&articleId=7020&blogId=299

14 訪問当日入手したパンフレット及び説明に使用したパワーポイントの資料をもとにしている。原文は英語だが筆者が日本語に訳した。

15 テストはオンラインで行えるようになっている。例えば、Restaurant（Grade 4-Basic）の場合、What would you like today? という質問に対して、I would like a hamburger and a small Coke, please. という文を作ることができるかどうかが問われている。語彙表の中から適切な語彙を選んで文を作っていく仕組みになっている。4年生のBasicで、既に語順の問題をさせている。4年生ではあるが、日本の中学校レベルの学習内容である。

16 Situational Learning と書いているが、Situational Approach と読み替えてもよいと思う。入手した資料には場面中心のレッスンプランがある。

17「英語教育用語辞典」大修館書店、277-288

18 1コマ（45分～50分）を1時間と計算している。

19 江原道には農村、漁村などいわゆるへき地小規模校が散在している。英語教育格差をなくするための英語の体験ができる「英語バス」を運行している。動く英語施設を活用して英語技能を伸ばす機会を全ての児童に提供するのが目的である。英語体験教室や外国人講師のいない学校へのサポートを行っている。

20 沖縄県「沖縄観光に関する統計・調査資料」（沖縄県HPより）

21 沖縄県「沖縄観光に関する統計・調査資料」（沖縄県HPより）